

「ロータリーの親睦」

ロータリー理念研究委員会
松田 泰長
(成田RC)

しばしば、ロータリーで親睦を図ることが、ロータリー運動の全てであるように誤解される。また、ゆらぎない親睦こそ、ロータリーが存続する絶対的条件だと考えているクラブもある。しかし、これらの二つの立場からの判断には、明らかに批判の余地がある。親睦はロータリー運動そのものではなく、ロータリーという植物が根をはり、成長するためにどうしても必要な、最上の土壌に過ぎないのである。素晴らしい親睦は、以下の事柄で証明される。

1. 心がこもった握手
2. ファースト・ネームで呼び合う付き合い
3. 唱歌
4. ある種の冗談
5. 会員相互の親切
6. 役員、同僚、ゲストに対する礼儀正しい行動
7. 成熟した実業家を象徴する紳士的態度と思慮深さ

これらの行為やこれらに類する行為は、ロータリーの素晴らしい親睦の表れである。

[A Talking Knowledge of Rotary]・ガイ・ガンデッカー

ロータリーが定義する親睦と奉仕は、ロータリー独自の概念であり、さらに、それを正しく理解しない限り、ロータリー思想の原理を語ることはできません。

fellowshipを「親睦」と訳したことに問題があるかもの知れませんが、むしろ、「友情」とか「友愛」と訳す方が理解し易いでしょう。

ロータリーが定義する親睦とは、一体、どんなことなのでしょう。[親睦]とはロータリークラブが、クラブとして存続していく上で欠かすことの出来ない必要条件となる、ロータリアン個人個人の心が結合した状態を表す概念です。

資本主義は19世紀後半から20世紀の初頭のアメリカに於いて、アメリカン・ドリームという美名の下でその爛熟期を迎えました。資本を蓄積した少数の人だけが成功者ともてはやされる、極端な資本主義の町では、同業者はすべて相手を蹴落とそうとするライバルであり、広告はすべて誇大か虚偽であり、濡れ手に粟のビジネス・チャンスをハイエナのごとく探し回る状態の中で、友情などが生まれる素地はまったくありませんでした。

その中で同じ価値観を持ち、共にすべてを語り合える仲間の集まりとして、ロータリークラブができたのです。

ロータリー運動の実体を、見事に表した言葉として、[入りて学び、出でて奉仕せよ Enter to learn, Go forth to serve] という言葉があります。世の中のあらゆる有用な職業から選ばれた裁量権を持った職業人が、一週一回の例会に集い、例会の場で、職業上の発想の交換を通じて、分かち合いの精神による事業の永続性を学び、友情を深め、自己改善を計り、その結果として奉仕の心が育まれてきます。この例会における一連の活動のことを「親睦」と呼ぶのです。例会で高められた奉仕の心を持って、それぞれの家庭、職場、地域社会に帰り、奉仕活動を実践します。これが理想とされるロータリー・ライフです。櫻木ガバナーが掲げられた「原点を知り、考える」に沿って親睦の原点をもう一度考えてみませんか。

参考文献

抜粋 ロータリーの源流 ——親睦と奉仕——

ロータリー理念研究委員会

海寶勘一 (千葉西)、平山勝己 (千葉若潮)、

大内 啓 (柏南)、島 正彦 (館山)、松田泰長 (成田)